

# 鴛鴦鏡

岡本綺堂

青空文庫



Y君は語る。

これは明治の末年、わたしが東北のある小さい町の警察署に勤めていた時の出来事と御承知ください。一体それは探偵談といふべきものか、怪談といふべきものか、自分にもよく判らない。こゝんにちの流行詞はやりことばでいえば、あるいは怪奇探偵談とでもいふべき部類のものであるかも知れない。

地方には今も往々見ることであるが、ここらも暦が新旧ともに

行なわれていて、盆や正月の場合にも町<sup>まち</sup>方<sup>かた</sup>では新曆による、在<sup>ざ</sup>方<sup>かた</sup>では旧曆によるという風習になつていたので、今この事件の起つた正月の下旬も、在方では旧正月を眼の前に控えている忙しい時であつた。例年に比べると雪の少ない年ではあつたが、それでも地面が白く凍つてゐることは言うまでもない。

夜の十一時頃に、わたし達は町と村との境にある弁天の祠<sup>やしろ</sup>のそばを通つた。当夜の非番で、村の或る家の俳句会に出席した帰り路である。連れの人々には途中で別れてしまつて、町の方角へむかつて帰つて来るのは、町の呉服屋の息子で俳号を野童という青年と私との二人ぎりであつた。月はないが星の明るい夜で、土地に馴れている私たちにも、夜ふけの寒い空気はかなりに鋭く感じ

られた。今夜の撰句の噂なども仕尽くして、ふたりは黙って俯向いて歩いていると、野童は突然にわたしの外套の袖をひいた。

「矢田さん。」

「え。」

「あすこに何かいるようですね。」

わたしは教えられた方角を透かして視ると、そこには小さい弁天の祠ほこらが暗いなかに立っていた。むかしは祠のほとりに湖水のような大きい池があったと言ひ伝えられていたが、その池もいつの代にかだんだんに埋められて、今は二三百坪になつてしまつたが、それでも相当に深いという噂であつた。狭い境内には杉や椿の古木もあるが、そのなかで最も眼に立つのは池の岸に垂れている二

本の柳の大樹で、この柳の青い蔭があるために、春から秋にかけては弁天の祠のありかが遠方から明らかに望み見られた。その柳も今は痩せている。その下に何物かがひそんでいるらしいのである。

「乞食かな。」と、わたしは言った。

「焚火をして火事でも出されると困りますね。」と、野童は言った。

去年の冬も乞食の焚火のために、村の山王の祠を焼かれたことがあるので、私は一応見とどける必要があると思つて、野童と一緒に小さい石橋をわたつて境内へ進み入ると、ここには堂守などの住む家もなく、唯わずかに社前の常夜燈の光りひとつが頼りで

あるが、その灯も今夜は消えているので、私たちは暗い木立ちのあいだを探るようにして辿たどつて行くほかはなかった。

足音を忍ばせてだんだんに近寄ると、池の岸にひとつの黒い影の動いているのが、水明かりと雪明かりと星明かりとでおぼろげに窺われた。その影はうずくまるように俯向いて、凍った雪を掻いているらしい。獣けものではない、確かに人である。私服を着ているが、わたしも警察官であるから、進み寄って声をかけた。

「おい。そこで何をしているのだ。」

相手はなんの返事もなしに、摺りぬけて立去ろうとするらしいので、わたしは追いかけて、その行く手に立ちふさがった。野童も外套の袖をはねのけて、すわといえは私の加勢をするべく身構

えしている、相手はむやみに逃げるのも不利益だと覺つたらしく、無言でそこに立ちどまつた。

「おい、黙つていては判らない。君は土地の者かね。」

「はい。」

「ここで何をしていたのだ。」

「はい。」

その声と様子とで、野童は早くも氣がついたらしい。ひとあし摺り寄つて呼びかけた。

「君は……。冬坡とうは君じゃないか。」

そう言われて、わたしも氣がついた。彼は町の煙草屋の息子で、雅号を冬坡という青年であるらしかった。冬坡もわれわれの俳句



仲間であるが、今夜の句会には欠席してこんなところに来ていたのである。そう判ると、わたし達もいささか拍子抜けの気味であった。

「うむ。冬坡君か。」と、わたしも言った。「今頃こんなところへ何しに来ていたのだ。夜詣りでもあるまい。」

「いや、夜詣りかも知れませんよ。」と、野童は笑った。「冬坡君は弁天さまへ夜詣りをするような訳があるんですから。」

なんにしてもその正体が冬坡と判った以上、私もむずかしい詮議も出来なくなつたので、三人が後や先になつて境内をあるき出した。野童は今夜の会の話などをして聞かせたが、冬坡はことば寡すくなくに挨拶するばかりで、身にしみて聞いていないらしかつた。

わたしの家は町はずれで、他のふたりは町のまん中に住んでいるので、わたしが一番さきに彼らと別れを告げなければならなかった。

二人に挨拶して自分の家へ帰ったが、冬坡の今夜の挙動がどうも私の腑に落ちなかつた。野童はなにもかも呑み込んでいるようなことを言っていたが、なんの子細があつて彼はこの寒い夜ふけに弁天の祠へ行つて、池のほとりにさまよつていたのであろう。しかし冬坡がこの頃ここらにも流行する不良青年の徒でないことは、わたしも平生からよく知っているので、彼がなんらかの犯罪事件に関係があろうとも思われぬ。したがつて、わたしも深く注意することなしに眠つてしまった。

そのあくる日は朝から出勤していたので、わたしは野童にも冬  
坡にも逢う機会がなかった。すると、次の日の午前九時ごろにな  
つて、一つの事件がかの弁天池のほとりに起つた。町の清月亭と  
いう料理屋の娘の死体が池のなかから発見されたのである。

娘はお照といつて、年は十九、色も白く、髪も黒く、容貌きりようも

悪くないのであるが、惜しいことには生れながらに左の足がすこ  
し短いので、いわゆる跛足という程でもないが、歩く格好はどう  
もよろしくない。殊にそういう商売屋の娘であるから、当人も平  
生からひどくそれを苦くにしていたらしい。だんだん年頃になるに  
連れて、その苦がいよいよ重つて来たらしく、この足が満足にな  
るならば私は十年ぐらいの寿命を縮めてもいいなどと、さきごろ

或る人に語つたという噂もある。それらの願掛けがんのためか、あるいは他に子細があるのか知らないが、お照は正月の七草ごろから弁天さまへ日参をはじめた。それも昼なかは人の眼に立つのを厭つて、日の暮れるのを待つて参詣するのを例としていた。料理屋商売としては、これから忙がしくなろうという灯ともしごろに出てゆくのは、少しく不似合いのようではあるが、彼女はひとり娘である上に、現在は女親ばかりで随分あまやかして育てているのと、もともと狭い土地であるから、弁天の祠まで往復十町あまりに過ぎないので、さのみの時間をも要しないがために、母も別にかれこれも言わなかつたらしい。お照は昨夜も参詣に出て行つて、こうした最期を遂げたのである。

清月亭は宵から三組ほどの客が落ち合っていたので、それにまぎれて初めのうちは気も付かなかつたが、八時ごろになつても娘が帰つて来ないので、母もすこしく不安を感じ出して、念のために雇人を見せにやると、弁天社内にお照のすがたは見えないと言つて、一旦はむなしく帰つて来た。いよいよ不安になつて、心あたりを二、三軒聞きあわせた後に、今度は母が雇人を連れて再び弁天の祠へ探しに行つたが、娘の影はやはり見あたらなかつた。彼女の死体はあくる朝になつて初めて発見されたのであつた。

その訴えに接して、わたしは一人の巡査とともに現場へ出張して、型のごとくにその死体を検視することになつた。池は南にむかつて日あたりのいいところにあるが、それでもここらのことで

あるから、岸のあたりはかなり厚く凍っている。お照の死体は池のまん中に浮かんでいたというのであるが、私たちの出張したときには、もう岸の上に引揚げられて、しよせん無駄とは知りながら藁火などで温められていた。

この場合、他殺か自殺かを決するのが第一の問題であることは言うまでもない。医師もあとから駆けつけて来たが、誰の目にもすぐに疑われるのは、お照の額のやや左に寄つたところに、なまな生々ましい打ち疵の痕が残っていることである。しかもそれをもつて一途いちぢずに他殺の証拠と認め難いのは、ここらの池や川は氷が厚いので、それが自然に裂けて剣つるぎのように尖っている所もある。あるいは自然に凸起して岩のように突き出ている所もある。それがた

めに自殺を目的の投身者も往々その氷に触れて顔や手足を傷つけている場合があるので、お照の死体もその額の疵だけで他殺と速断するのは危険であることを私たちも考えなければならなかった。殊に医師の検案によると、死体は相当に水を飲んでいるというのであるから、他殺の死体を水中に投げ込んだという疑いはいよいよ薄くなるわけである。

もしお照が自殺であるとすれば、彼女は投身の目的で岸から飛び込んだが、氷が厚いので目的を達しがたく、単に額を傷つけたにとどまったので、さらに這い起きて真ん中まで進んで行って、氷の薄いところを選んで再び投身したものと察せられる。しかし困ったことには、私たちの出張するのを待たずして、早く死体を

引揚げてしまったために、氷の上は大勢に踏み荒らされて、泥どろわ草鞋らじなどの跡が乱れているので、その当時の状況を判断するについて、はなはだしい不便を与えるのであった。

この時、わたしの注意をひいたのは、岸に垂れている二本の枯柳の大樹の根もとが、二つながら掘り返されていることである。さらに検あめると、一本の根もとの土は乾いている。他の一本の根もとの土はまだ乾かないで、新しく掘り返されたように見える。わたしはそこらに集まっている土地の者に訊いた。

「この柳の下はどうしてこんなに掘つてあるのかね。」

いずれも顔を見合せているばかりで、進んで返事をする者はなかった。誰も今まで気がつかなかったというのである。わたしは



岸に近い氷の上に降りて立って、再びそこらを見まわすと、凍り着いているまばらな枯芦のあいだに、園芸用かとも思われるような小さいスコップを発見した。スコップには泥や雪が凍っていた。何者かがこのスコップを用いて、柳の下を掘ったのであろう。そう思った一刹那、かの冬坡のすがたが私の目先にひらめいた。彼はおとといの晩、この柳の下にうずくまつて、凍った雪を掻いていたのである。

## 二

お照の死体は清月亭の親許へ引渡された。

種々の状況を総合して考えると、大体において自殺説が有力であつた。彼女は自分が跛足に近いのを近ごろ著るしく悲観して、いちじたという事実がある以上、若い女の思いつめて、遂に自殺を企てたものと認めるのが正当であるらしかつた。もう一つ、清月亭の女中たちの申立てによると、その相手は誰であるか判らないが、お照は近来なにかの恋愛關係を生じて、それがために人知れず煩悶していたらしいというのである。そうなると、自殺の疑いがいよいよ濃厚になつて来て、不具者の恋、それが彼女を死の手へ引渡したものと認められて、警察側でも深く踏み込んで詮議するのを見合せるようになった。

冬坡は何のために柳の下を掘っていたのか。又それがお照の死

と何かの関係があるのかないのか。それらのことは容易に判断が付かなかつたが、わたしは警部という職務のおもて、一応は冬坡を取調べるのが当然であると考えていると、あたかもその日の夕方、町の裏通りで冬坡に出逢った。

そこは東源寺という寺の横手で、玉椿の生垣のなかには雪に埋もれた墓場が白く見えて、ところどころに大きい杉が立っていた。ゆうぐれの寒い風はその梢をざわざわと揺すって、どこかで鴉の啼く声もきこえた。冬坡はわたしの来るのを知っているのか、知らないのか、俯向きがちに摺れちがって行き過ぎようとするのを、わたしは小声で呼びかえした。

「冬坡君。どこへ行くのだ。」

彼はおびえたように立停まって、無言でわたしに挨拶した。冬坡は平生から温良の青年である。殊にわたしの俳句友達である。彼に対して職権を示そうなどとは勿論かんがえていないので、わたしは個人的に打解けて訊いた。

「君はおとといの晩、あの弁天池のところで何をしていたのかね。」  
 彼はだまっていた。

「君はスコップで何か掘っていたのじゃないかな。」と、わたしは畳みかけて訊いた。

「いいえ。」

「では、夜ふけにあすこへ行つて、何をしていたのかね。」

彼はまた黙ってしまった。

「君はゆうべもあの池へ行つたかね。」

「いいえ。」

「なんでも正直に言つてくれないと困る。さもないと、わたしは職務上、君を引致いんちしなければならぬことになる。それは私も好まないことであるから、正直に話してくれ給え。ゆうべはともあれ、おとといの晩は何をしに行つたのだね。」

冬坡はやはり黙つていたのである。こうなると、私も少しく語気を改めなければならなくなつた。

「君はふだんに似合わず、ひどく強情だな。隠していると、君のためにならないぜ。実は警察の方では、清月亭のむすめは他殺と

認めて、君にも疑いをかけているのだ。」と、わたしは嚇すように言った。

「そうかも知れません。」と、彼は低い声で独り言のようにいった。

「それじゃあ君は何か疑われるような覚えがあるのかな。」

言いかけて私はふと見かえると、折れ曲った生垣の角から一人の女の顔が見えた。女は顔だけをあらわして、こちらを窺っているらしかった。もう暮れかかっているので、その人相はよく判らないが、ゆう闇のなかにも薄白く浮かんでいる彼女の顔が、どうも堅気の女ではないらしい。わたしはそう直覚しながら、さらによく見定めようとする時、不意にわっという声がかきこえた。何者

かがうしろから彼女を嚇したのである。つづいて若い男の笑い声がきこえて、角から現われ出たのは野童であつた。

彼らとわたし達との距離は四、五間に過ぎないのであるから、このいたずら騒ぎのために、今まで隠されていた女の姿も自然にわたしの目先へ押出された。女はコートを着て、襟巻に顔の半分を深く埋めていたが、それが町の芸者であるらしいことは大抵察せられた。野童の家はこの町でも大きい店で、彼も相当に道楽をするらしいから、かねてこの芸者を識っているのであろう。そう思っているうちに、野童の方でもわたし達の姿を見つけて、足早に進み寄つて来た。

「今晚は……。やあ、冬坡君もいたのか。」

そうは言ったものの、彼は俄かに口をつぐんで、わたし達の顔をじつと眺めていた。普通の立ち話以外に何かの子細があるらしいことを、彼もすぐに覺つたらしい。飛んだ邪魔者が来たとは思つたが、わたしも笑いながら挨拶した。

「君と今ふざけていたのは誰だね。」

「え。あれは……。」と、野童は冬坡の顔をみながら再び口をつぐんだ。

「ああ、それじゃあ冬坡君のおなじみかね。」

わたしは再び見かえると、女の姿はいつの間にか消えてしまつて、あたりを包む夕闇の色はいよいよ深く迫つて来た。

野童はおとこの晩わたしに向つて、冬坡君は弁天さまへ夜詣



りをする訳があると言った。してみると、彼は冬坡について何かの秘密を知っているらしい。その秘密はかの芸者に関係することではあるまいか。しかしそれだけのことならば、いかに内気の青年であるといつても、冬坡が堅く秘密を守るほどの事もあるまい。いずれにしても、野童と冬坡とは別々に取調べる必要がある。ふたりが鼻を突き合せていては、その取調べに不便があると思つたので、わたしはここで、ひとまず冬坡を手放すことにした。

二つ三つ冗談を言つて、わたしはそのまま行きかけると、野童は曲り角まで追つて来て、そつと訊いた。

「あなたは今、冬坡君を何か調べておいでになつたのですか。」  
「うむ、少し訊きたいことがあつて……。君にも訊きたいことが

あるのだが、今夜わたしの家へ来てくれないか。」

「まいます。」

わたしは家へ帰って風呂にはいって、ゆう飯を食ってしまったが、野童はまだ来なかった。そのうちに細かい雪が降り出して来たと、家内の者が言った。この春はここに珍らしいほど降らなかったたのであるから、もう降り出す頃であろうと思ひながら、薄暗い電燈の下で炬燵こたつにはいつていると、外の雪は音もなしに降りつづけているらしかった。

九時過ぎになって、野童が来た。いつもは遠慮なしに炬燵にはいつて差向いになるのであるが、今夜はなんだか固くなって、平生よりも行儀よく坐っていた。炬燵にはいれと勧めても、彼は躊

躊躇しているらしいので、わたしは妻に言いつけて、彼に手あぶりの火鉢をあたえさせた。

「とうとう降り出したようだな。」と、わたしは言った。

「降って来ました。今度はちっと積もるでしょう。」

「さっきの芸妓はなんとという女だね。」

野童は暗い顔をいよいよ暗くして答えた。

「染吉です。」

「ああ、染吉か。」とわたしは二十三四の、色の白い、眉の力りきんだ、右の目尻に大きい黒子ほくろのある女の顔をあたまに描いた。

「それについて、今夜出ましたのですが……。」と、野童は左右へ気配りするように声をひそめて言い出した。「あなたはなんで

冬坡君をお調べになつたのでしようか。」

わたしはすぐには答えないで、相手の顔を睨むように見つめてみると、彼は恐れるように少しためらっていたが、やがて小声でまた言いつづけた。

「さつき寺の横手で、あなたにお目にかかった時に、どうもなんだかおかしいと思ひまして、あれから冬坡を或る所へ連れて行つて、いろいろに詮議をしますと、最初は黙つていて、なかなか口をあかなかつたのですが、わたくしがだんだん説得しましたので、とうとう何もかも白状しました。」

「白状……。なにを白状したのかね。あの男がやつぱり清月亭のむすめを殺したのか。」と、わたしはもう大抵のことを心得てい

るような顔をして、探りを入れた。

「まあ、お聴きください。御承知の通り、冬坡はおふくろと弟と三人暮らしで、大して都合がいいというわけでもなく、殊におとなしい性質の男ですから、自分から進んで花柳界へ踏み込むようなことはなかつたのですが、商売が煙草屋で、花柳界に近いところにあるので、芸妓や料理屋の女中たちはみんな冬坡の店へ煙草を買いに行きます。冬坡はおとなしい上に男振りもいいので、浮気っぽい花柳界にはなかなか人気があつて、ちつとぐらい遠いところにいる者でも、わざわざ廻り路をして冬坡の店へ買いに来るようなわけでしたが、そのなかでもあの染吉が大熱心で、どういふふうに誘いかけたのか知りませんが、去年の秋祭りの頃から冬

坡と関係をつけてしまったのだそうです。染吉もなかなか利口な女ですし、冬坡はおとなしい男なので、二人の秘密はよほど嚴重に守られて、今まで誰にも覺られなかつたのです。わたくしもちつとも知りませんでした。いや、まったく知らなかつたのです。」

あるいは薄うす知つていたかも知れないが、この場合、彼としてはまずこう言うのほかはあるまいと思ひながら、わたしは黙つてきいていた。

## 三

外の雪には風がまじつて来たらしく、窓の戸を時どきに揺する

音がきこえた。雪や風には馴れているはずの野童が、今夜はなんだかそれを気にするように、幾たびか見返りながらまた語りつづけた。

「そのうちに、またひとりの競争者があらわれてきました。と申したら、大抵御推量もつきましようが、それはかの清月亭のお照で、もちろん染吉との関係を知らないで、だんだんに冬坡の方へ接近してきて、これも去年の冬頃から関係が出来てしまったのです。こう言うと、冬坡ははなはだふしだらのようにも聞えますが、何分にもああいう気の弱い男ですから、女の方から眼の色を変えて強く迫って来られると、それを払いのけるだけの勇気がないので、どっちにも義理が悪いと思いなから、両方の女にひきずられ

て、まあずるずるにその日その日を送っていたという訳です。

しかし、それがいつまでも無事にすむはずがありません。去年の暮に、冬坡のおふくろが風邪をひいて、冬至とうじの日から廿六日頃まで一週間ほど寝込んだことがあります。そのときに染吉とお照とが見舞に来て……。どちらも菓子折かなにかを持ってきて、しかも同時に落合ったものですから、はなはだ工合の悪いことになつてしまいました。どうもひと通りの見舞ではないらしいと染吉も睨む、お照も睨む。双方睨みあい、そのときは何事もなく別れたのですが、二人の女の胸のなかに青い火や紅い火が一度に燃えあがったのは判り切ったことです。

そこで、人間はまあ五分五分としても、お照の方が年も若いし、



おまけに相当の料理屋の娘というのですから、この方に強味があるわけですが、困ったことには片足が短い、まあこういう場合にはそれが非情な弱味になります。また、染吉は冬坡よりも二つ年上であるというのが第一の弱味である上に、競争の相手が自分の出先の清月亭の娘というのですから、商売上の弱味もあります。そんなわけで、どちらにもいろいろと弱味があるだけに、余計に修羅を燃やすようにもなつて、その競争が激烈というか、深刻というか、他人には想像の出来ないように物凄いものになつて来たらしいのです。

しかし、なにぶんにも暮から正月にかけては、料理屋も芸妓も商売の忙がしいのに追われて、男の問題にばかり係りあつてもい

られなかつたのですが、正月も、もうなかば過ぎになつて、お正月気分もだんだんに薄れてくると、この問題の火の手がまたさかんにになりました。染吉もお照も暇さえあれば冬坡を呼び出して、恨みを言つたり、愚痴を言つたりして、めちやめちやに男を小突きまわしていたらしいのです。この春になつてから、冬坡がとかくに句会を怠けがちであつたのも、そんなもんちやく捫着のためであつたということが今わかりました。」

「しかし君はおとといの晩、冬坡君は夜詣りをするわけがあると言つたね。」と、わたしはやや皮肉らしく微笑した。

野童はすこし慌てたように詞をことばとぎらせた。なんといつても、彼はすでに冬坡の秘密を知つていたに相違ないのである。しかし

ここで詰まらない揚げ足をとつていて、肝腎の本題が横道へそれではならないと思つたので、わたしは笑いながらまた言つた。

「そこで、結局どういふことになつたのだね。」

「染吉とお照は一方に冬坡をいじめながら、一方には神信心をはじめました。殊にああいう社会の女たちですから、毎晩かの弁天さまへ夜詣りをして、恋の勝利を祈つていたのです。そのうちに誰が教えたか知りませんが、弁天さまは嫉妬深いから、そんな願掛けはきいてくれないばかりか、かえつて祟りがあると言つたので、染吉はこの廿日ごろから夜詣りをやめました。お照も廿三四日頃からやはり参詣を見合せたそうです。すると、この廿五日の巳みの日の晩に、二人がおなじ夢を見たのです。」

「夢をみた……。」

「それが実に不思議だと冬坡も言っていました。」と、野童自身も不思議そうに言った。「それが二人ながらちつとも違わないのです。弁天さまが染吉とお照の枕元へあらわれて、境内の柳の下を掘ってみろ。そこには古い鏡が埋まっている。それを掘出したものは自分の願がんが叶うのだというお告げがあつたそうです。そこで、あくる晩、染吉はお座敷の歸りに冬坡をよび出して、これから一緒に弁天さまへ行つてくれと無理に境内へ連れ込んで、一本の柳の下を掘つているところへ、あなたとわたくしが来かけたので、染吉はあわてて祠のうしろへ隠れてしまつて、冬坡だけがわれわれに見付けられたのです。常夜燈を消して置いたのも染吉

の仕業で、何分あたりが暗いので、そこらに染吉の隠れているとは一向気が付きませんでした。われわれが立去ったあとで、染吉が再び掘ろうとしたのですが、冬坡がスコップを持って行ってしまったので、仕方がなしに帰って来たそうです。」

「お照は掘りに来なかったのだね。」

「お照がなぜすぐに来なかったのか、その子細はわかりません。商売が商売ですから、その晩はどうしても出られなかったのかも知れません。それでも次の日、すなわち昨日の夕方に冬坡を呼び出して、やはり一緒に行ってくれと言ったそうですが、冬坡はうべに懲りているので、夢なんぞはあてになるものではないからやめた方がいいと言って、とうとう断ってしまいました。それで

もお照は思い切れないで、自分ひとりで弁天の祠へ行つて、二本目の柳の下から鏡を掘出したのです。」

「鏡……。ほんとうに鏡が埋められていたのか。」と、わたしは炬燵の上からからだを乗出して訊いた。

「まったく古い鏡が出たのだから不思議です。」と、彼は小声に力をこめて言った。「お照がそれを掘出したところへ、染吉があとから来ました。染吉もまだ思い切れないので、今夜は日の暮れるのを待ちかねて、二本目の柳の下を掘りに来ると、お照がもう先廻りをしているので驚きました。どちらもあからさまに口へ出して言えることではありませんから、お互いにまあいい加減な挨拶などをしていっているうちに、お照がなにか鏡のようなものを袖の下

にかくしているのを、常夜燈のひかりで染吉が見付けたのです。お照も早く常夜燈を消しておけばよかったですでしょうが、年が若いだけにそれ程の注意が行き届かなかったので、たちまち相手に見付けられてしまったのです。一方のお照が死んでいるので、詳しいことはわかりませんが、染吉はそれを見せろと言い、お照は見せないと言う。日は暮れている、あたりに人はなし、もうこうなれば仇同士の喧嘩になるよりほかはありません。なんといいつても、染吉の方が年上ですし、お照は足が不自由という弱味もあるので、その鏡をとうとう染吉に奪い取られました。それを取返そうとしがみつくと、染吉ももうのぼせているので、持っている鏡で相手の額を力まかせに殴りつけた上に、池のなかへ突き落して

逃げました。」

お照の額の疵は氷のためではなかった。たとい氷でないとしても、それが鏡のたぐいであろうとは、わたしも少しく意外であった。

「ただ突き落して逃げたのだね。」と、わたしは念を押した。

「染吉はそう言っているそうです。御承知の通り、岸の氷は厚いのですから、ただ突き落したただけでは溺死する筈はありません。まんなか辺まで引摺って行って突き落すか。それとも染吉が立去ったあとで、お照は水でも飲むつもりで真ん中まで這い出して行って、氷が薄いために思わず滑り込んだのか。あるいは大切な鏡を奪い取られたために、一途に悲観して自殺する気になったのか。」



それらの事情はよく判らないのですが、いずれにしても自分がお照を殺したも同然だといって、染吉は覚悟しているそうです。」

「覚悟している……。それでは自首するつもりかね。」

「それが困るのです。」と、野童は顔をしかめた。「自分でもそう覚悟をしていながら、やはり女の未練で、きょうも冬坡を寺の墓地へよび出して、これから一緒に北海道へ逃げてくれと頻りに口説いているのです。」

「冬坡はどこにいるね。」

「今はわたくしの家の奥座敷に置いてあるのです。うっかりした所にいると、染吉が付きまどって来て何をするか判りませんから

。」

「よろしい。それではすぐに女を引挙げることにしよう。君の留守に、冬坡が又ぬけ出しでもすると困るから、早く帰って保護していてくれ給え。」

野童をさきに帰して、わたしはすぐに官服に着かえて出ると、表はもう眼もあけられないような吹雪になっていた。署へ行つて染吉を引致の手続きをすると、彼女は午後から一度も抱え主の家へ帰らないというのであつた。停車場へ聞き合せにやつたが、彼女が汽車に乗込んだような形跡はなかつた。

もしやと思つて、弁天社内を調べさせると、あたかもお照とおなじように、その死体は池の中から発見された。雪と水とに濡れている染吉のふところには、古い鏡を大事そうに抱いていた。冬

坡を連れて逃げる望みもないとあきらめて、彼女はここを死に場所を選んだのであろう。お照がみずから滑り込んだのであれば勿論、たとい染吉が引摺り込んだとしても、事情が事情であるから死刑にはなるまい。しかも彼女は思い切って恋のかたきの跡を追ったのである。

鏡は青銅でつくられて、その裏には一双の鴛鴦おしどりが彫つてあつた。鑑定家の説によると、これは支那から渡来したもので、おそらく漢の時代の製作であろうということであつた。漢といえれば殆んど二千年の昔である。そんな古い物がいつの代よに渡つて来て、こんなところにどうして埋められていたのか、勿論わからない。さらに不思議なのは、染吉もお照もおなじ夢を見せられて、その

鏡のために同じ終りを遂げたことである。弁天さまに対して恋の願掛けなどをしたために、そんな祟りを蒙ったのであろうと、花柳界の者は怖ろしそうに語り伝えていた。実際わたし達にもその理屈が判らないのであるから、迷信ぶかい花柳界の人々がそんなことを言いふらすのも無理はなかった。殊にその鏡の裏に鴛鴦が彫つてあつたということも、この場合には何かの意味ありげにも思われた。

冬坡は一応の取調べを受けただけで済んだが、土地に居にくくなつたとみえて、五里ほど離れている隣りの町へ引つ越してしまつたが、その後別に変つたこともないように聞いている。





# 青空文庫情報

底本：「異妖の怪談集 岡本綺堂伝奇小説集 其ノ二」原書房

1999（平成11）年7月2日第1刷

初出：「新青年」

1928（昭和3）年10月

入力：網迫、土屋隆

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。



# 鴛鴦鏡

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>